

自律学習に役立つ動機づけストラテジーの 理論と実践

杉 野 俊 子・植 田 麻 実
阿 部 恵美佳・清 水 順

Motivational Strategies for Autonomous Learning: Its Theoretical Framework and Practice

SUGINO Toshiko, UEDA Mami, ABE Emika, SHIMIZU Sunao

はじめに

動機づけ (motivation) は、やる気・熱意・意欲とも言われ、人間が社会生活の中で行動する時に重要な要因になっている。第二言語習得 (Second Language Acquisition-SLA) の分野では、どのように学習者の学習成果を高めていくかに関心が置かれており、動機づけがその達成に大きな影響力を持っていることは Gardner & Lambert (1959) 以降、多くの研究者によって指摘されてきた (Ellis, 2001)。

動機づけが第二言語習得にとって重要であるのと同様に、動機減退 (demotivation) も重要な要因になっている。Dörnyei (2001) によると、第二言語習得の動機減退と動機づけはコインの裏返しのようなものだと考えられ、学習者が進んで学習しようとする気持ちに否定的に影響を与える外的要因に、動機減退が影響を与えていると言われている。

近年、日本でも動機減退の要因を調査する研究が行われている。Kikuchi & Sakai (2009) は、学習者の学習動機を高めるためには、動機を失わせる要因を調査するだけでなく、学習者が動機をなくした時にどのようにして再び動機を回復したのか、また、動機をなくさないためにどのようなストラテジー (strategy) を用いているのかを調べることは重要であると示唆した。学習ストラテジーの研究で知られる Oxford は、学習ストラテジーの中で、動機づけを維持・向上させるときに使うストラテジーを動機づけストラテジー (motivational strategies) と呼んでいる (2011)。その中でも、自己調整された学習ストラテジー (self-

regulated learning strategy) は、やる気を出しそれを維持することに効果的なので、学習者に役立つと考えられている (Oxford, 2011)。

実際、学習者はどのように動機づけの維持・取戻し・向上を行っているのだろうか、英語上級者あるいは動機づけの高い学習者は、効果的なストラテジーを身に付けていると言われているが実際はどうであろうか、という疑問から、以下の3つの研究設問が考えられた。

1. 学習者はどのような動機づけストラテジーを使うのか。
2. 学習者は、動機が減退した時に、どのように対処しているのか。
3. 動機づけの高い学習者はどのような動機づけストラテジーを使うのか。

本論は、動機づけ要因に焦点を当てながら、上記の3つの研究設問に答えていくことを目的とした。本研究¹では、初めに動機づけと動機づけ減退に関する理論を紹介し、次に、4名の英語教師による15名の聞き取り調査の結果を示し、動機づけストラテジーの実践例の提示ならびに考察と示唆を試みる。

1. 動機づけ理論の研究

動機づけは、学習にとって非常に重要なものであり、第二言語習得がうまくいくかどうかのカギとなるものであるが、動機づけとは一体どういうものかという説明については、研究者の意見の一致をみているわけではない (Ellis, 2001; Oxford & Shearin, 1994)。第二言語学習にとって、動機づけが重要であると同様に、動機減退 (demotivation) も重要な要因になっている。Dörnyei (2001) は、第二言語習得の「動機減退」と「動機のある」状態は表裏一体のものであり、動機づけを真に理解するには、なぜ動機が減退してしまったのかという原因の追究が重要であると述べている。しかし、Trang & Baldauf (2007) は、動機減退またはその喪失に関する研究は少ないとはいえ、もともと備わっていた動機が減退してしまったことと、もともとその学習者の動機づけが少なかったというのは別のことであるが、この二つは簡単に結び付けられがちだと警告している。

たとえば、日本の英語教育では学習者がすでに学ぶ動機をもっているという前提にたっているが、大学教師は、特に基礎教育の必修英語の授業などでは、英語を学ぶ動機が見られない学生が多く存在する現実と直面することになる (植田、阿部他 2011)。Chambers (1993) は、「動機減退」は学習者だけでなく、教師側にも影響を与えると主張している。たとえば、もともと動機づけされていない学習者と、学習習熟度が低い学生とは本来別であり、それは、後者が上達した時には、たとえ彼らの上達度が小さくても、教師にも学習者にも満足感を与えることを挙げている。

¹ 本研究は第11回 International Symposium on Advanced Technology (ISAT 2012年10月30日工学院大学にて) で発表した英文の原稿を日本語に直し、新しい実践報告などを付け加えたものである。

一方、あらゆる手をつくしても動機を持たない学習者の「動機減退」は学習者と教師にとって問題点となる。Sugino (2010) による、97 人の教師がどのような要因で動機をなくすのかをアンケートで調査した研究はその一例であり、以下はその結果の一部である。

Sugino (2010) の特に前半の demotivation の原因として挙げられた項目からは、教師側と学習者側の動機減退が関係を持っていることが示唆され、後半に挙げられた項目からは、教師にまつわる教室外での動機減退要因も指摘されている。つまり、この調査結果は、Zang (2007) などの学習者側からの声だけを集約した、動機減退の理由として教師が挙げられる結果だけでなく、学習者を取りまく人間関係に関連するより綿密な研究の必要性を示唆している。

表 1 教師が動機減退を経験する要因 N=97

学生の態度に関して	M (最大4)
1. 授業内に携帯をいじっている。	3.85
2. 居眠り	3.78
3. 反抗的な態度をとる	3.60
4. (英語で) 答えてくれない	3.43
5. 宿題を忘れる	3.30
就労条件、設備、カリキュラム等	
1. 会議時間が長い	3.61
2. 書類作成が多い	3.50
3. 研究時間が十分とれない	3.40
4. 大学側から評価されない	3.41
5. 雇用形態が不安定である (非常勤のため)	3.34
6. カリキュラムに一貫性がない	3.29

こうした教師側の動機減退要因にも関係するが、荒 (2008) は、「勉強力」という言葉を用いて、学習者側も、学生が本来もっているはずの「勉強力」をもう一度問い直してもいいのでは、と述べている。たとえば、教師が訥弁であったなどの教室での状況においても、真摯に教師の言葉に学習者が耳を傾ける姿勢があれば、そこに教師との間のより良い関係性を生むことが示唆されている。

Ushioda (1996) では、“motivational thinking” という表現を用い、学習者が内包している、学びを続けたいという強力な推進力とその個人差に触れている (p.12)。同書ではまた、学習者の動機づけの度合いと学業における進展との関係性についての調査結果も紹介している。そこでは、学習の目標構造をはっきり持って学習をしている、すなわち学習の動機づけがはっきりしているグループの落第や退学率は、そうでないグループよりも圧倒的に低かったことを紹介している (p.18)。たとえ学びの目標やその過程における信条や優先順位などは学習者によって異なるものであるとしても、動機は学習者にとって目標言語習得へと日々

の努力をすることの原動力の一つになっているという点が明白にされている。

先行研究 (Shimizu, Abe, Ueda & others, 2010) で明らかになったのは、動機を失わせる要因と、動機を失っていたが取り戻すきっかけとなった要因である。動機を失わせる四つの主要因として浮上したのは、1) 文法学習の困難さ、2) 長文読解の困難さ、3) 教師との相性の悪さ、そして4) 英語学習の目的の不明瞭さであった。4番目の要因は、上記の Ushioda (1996) における指摘とも合致するものである。また1番目と2番目の要因は、英語習得そのものを困難と感じている学習者と動機減退との関連性を示唆しているものであり、学習者が目標言語習得を困難と結論づけることを阻止するための早急なカリキュラムの改正や学習支援の必要性が明らかになった。また3番目の教師との相性の悪さに関しては先行研究 (荒井, 2008; Kikuchi and Sakai, 2009; Zang, 2007) と、その結果は附合した。

しかし同時に、一度動機を失ったが後にそれを取り戻した学習者の自由記述からは、『教師』との出会いが明らかになった (Shimizu, Abe, Ueda, & others, 2010)。そこでの動機をとりもどす結果となった教師像は、1) 教え方の上手な知識の豊かな教師、2) 自分の心情を理解してくれる教師、3) 熱心な学習者へのコミットメントの度合いの高い教師、であった。この結果は、保坂 (2008) に挙げられている英語教師像とも合致するものであった。

前述の先行研究では、学習者が動機をなくしたり、動機を回復したりする要因や習慣的に使っている動機づけストラテジーなどについて、アンケート調査では行ったが、個々の学習者に背景となる情報を個人的に聞けなかったため、この予備研究で以下の研究設問に沿って明らかにしていった。研究設問は以下の3点である。

1. 学生が動機を失くしたきっかけは何か。
2. 学生は「動機減退」を経験した時にそれとどのように向き合っているのか。
3. 動機が高い学生は、どのような動機づけストラテジーを使っているか。

2. 聞き取り調査

2.1 聞き取り調査の内容と実施要領

聞き取り調査の内容については、本研究の筆者4人で話し合って調査項目を作った。研究設問は1) 動機をなくしたきっかけは何か、2) 動機を回復したきっかけは何か、3) (動機づけの高い学生については) どのような動機づけストラテジーをとっているか、である。

実施要領は、今回は予備調査であること、前期末で時間が限られていること、聞き取り調査に応じてくれる学生の数に限られているという制約の下、4人の執筆者が関東地域の私立大学生で担当している最低2名の聞き取り調査を実行した。データ収集方法は二通りで行った。学生に直接インタビューする方法と、メールを介してである。前者は20-30分行われ、録音されたインタビューは後に文字起しをした。表2は調査協力者の一覧である。

インタビューは、関東の4大学で教えている4人の教師によって、計14人(女性7人、

男性7人)の、英語を外国語として勉強している日本人大学生に実施された。14人中9人が1年生、3人が3年生、2人が4年生であった。

2.2 調査協力者

表2 調査協力者の背景一覧

学生コード	学年(性別)	理系/文系	動機はいつ喪失したか	動機を回復したかきっかけ
A	3年生(男)	理系	中学校	大学
B	1年生(女)	理系	なくしたことはない	いつも動機がある
C	3年生(男)	理系	中学校	大学
D	3年生(男)	理系	中学校	大学
E	1年生(女)	文系	受験	予備校
F	1年生(女)	文系	受験	読書
G	1年生(男)	文系	中学、高校	高校、ホームステイ
H	4年生(女)	文系	中学校	予備校
I	4年生(女)	文系	なくしたことはない	いつも動機がある
J	1年生(女)	理系	なくしたことはない	いつも動機がある
K	1年生(男)	理系	英語に通じない時	初心に戻る
L	1年生(男)	理系	何回も	Jポップを聞く
M	1年生(男)	理系	中学	塾、検定試験
N	1年生(女)	理系	なくしたことはない	いつも動機がある

調査の参加者は18歳から30歳までで、彼らは異なった学習経験を持っていた。学生Aから学生Iは、18歳から22歳の大学生であった。学生Jは、数年間日本と海外で働き、日本の大学に帰ってきた。何人かの学生は、自主的にインタビューに参加した。その他は、教師が動機づけの高い学生を選抜した。

まず、5人(A, C, D, G, H)は、中学生の時に、英語学習への動機をなくした。彼らの内3人はそれぞれ、大学、予備校、そして高等学校とホームステイで学習意欲を回復させた。次に、3人(B, I, J)は、学習への動機を失うことなく、いつでも意欲的だった。最後に、残りの2人(E, F)は、大学入試の時英語学習への意欲をなくした。しかし、それぞれは予備校や入試勉強をする代わりに英語の本を読むことで意欲回復させた。

3. インタビュー結果と考察

研究設問1「動機をなくしたきっかけは」は何ですかという質問と、研究設問2「動機を回復したきっかけは何か」という設問の回答を対にして以下に紹介する。動機をなくしたことがないと答えた学生B, I, J, Nの4人の学生は含んでいない。

表3 動機を失くしたきっかけ、回復したきっかけ

学年・性別	動機をなくしたきっかけ	動機を回復したきっかけ
A (3年男)	中学の時、成績が悪かった。英語の授業で文法が全く理解できず、それ以前に単語が読めなかった。英語の正しい読み方が出来なくてつらかった。「海外には行かないからいいよ」などの現実逃避が始まり、いよいよ英語が嫌いになった。	単語練習や予習をしたが、成功するとか結局好きになる程ではなかった。大学は英語の授業が多く、やるしかないと思った。弓道をやっているのも、海外で弓道教室をやってもいいかなと、ほんやりと思ったりしている。
C (3年男)	中3の時。勉強する意欲がなくなった。学校に行かなくなった。	単語の暗記や他の勉強に関係ある資料を英文で読む。高卒認定と大検のため予備校に通い始めた。中学の勉強から復習し、徹底的なシャドーイングと長文読解で、ほぼ現在の英語力に至った。
D (3年男)	日本語との文法の違いに戸惑い、苦手意識がついて。さらに中2で先生が変わり、学習意欲を失くした。高3の先生に努力を評価してもらえず、完全に意欲を失くした。	高校1・2年の時の先生の教え方がよく、成績が「2」から「4」に上がった。わかりやすい先生だと意欲がわく。大学では意欲があるが、未だに英語に対する苦手意識を払えないでいる。
E (1年女)	中1から英語は好きだったが、大学入試に落ちて動機がなくなった。六千語英単語を覚えたのにしゃべれなくて落ち込んだ。	浪人した時、受験勉強のお蔭で英文法がわかるようになった。予備校の先生がすごくわかりやすく文法を教えてくれた。
F (1年女)	大学入試に落ちて動機がなくなった。文法が苦手。発音がわからないと言われるとめげる。	日本語の小説等が大好きだったので、文法より英語の物語などを読んでいたので、長文読解が得意になった。
G (1年男)	中・高ずっと英語を覚えることが苦手だった。授業がつまらなくて動機を失くした。	高1の先生が英語で質問し自分で考えて答えるやり方がおもしろかった。国内のホームステイで、英語でコミュニケーションをする経験が楽しかった。
H (4年女)	中学で、日本語以外学ばなければいけない理由が理解できなかった。英語は全くわからなかった。授業は苦痛に耐えていた。	高校受験のために、中3の時に夏期講習を受けた。その時の先生がわかりやすくて、英語のしくみがわかり好きになった。
K (1年男)	自分の英語が通じなかったり、簡単な英語が急に読めなくなったりすると自信を失って嫌になる。	嫌になった時は少し英語から離れるか、もう一度基礎から勉強しなおして初心に戻る。また頑張ればよいと、心を改めて勉強する。
L (1年男)	英語が嫌になった時、自信がなくなった時はたくさんある。	そのような時は英語の歌詞が多いJポップを聞くようにしている。
M (1年男)	中学の時英語は全く出来なかった。	高校から塾に通い、英検2級を獲得し、「英語嫌い」を必死で克服した。

次に、研究設問3：動機が高い学生は、どのような動機づけストラテジー（方策）を使っているか。この中で「動機減退」を経験したことのない学生はB、I、J、Nである。学習法の工夫、目的設定、気分転換、自己暗示などいくつかのパターンに分かれることがわかった。

表4 動機づけ方策とその具体例

動機づけ方策	具体例（B、I、J、Nは動機づけが常に高い学生—太字で標記）
学習法の工夫	<p>B：（留学先で）最初英語での授業に慣れるまでは、文系科目を避けて、自分の得意な理数系科目を中心に授業をとるなどして、ある程度自分が知識を持っているものを履修するようにした。サークルのメンバー（英語話者）や同じ留学生の子に勉強や英語を色々教えてもらった。</p> <p>C：授業をまじめにうけ、わからない部分を短時間で学習。 単純な学習（単語の暗記）や英語で書かれたほかの勉強に関係ある資料を読む。身の回りにある英語から常に学ぶ姿勢を保ち、英語の能力を下げない。</p> <p>E：落ち込んだ時、苦手なところを徹底的に勉強して頑張れば、やる気のなさから抜け出せると思う。</p> <p>F：（小さい時から日本語の読書が好き）日本語力が英語の読解力に影響を及ぼしていると思う。</p> <p>G：英語の勉強はあまりせず、①学校外で中2のころ洋楽を流暢に歌おうとしていた。発音はその頃身についたと思う。その頃から②DVDで洋画を見て、字幕を英語にして自分で意味を考えて、そのあと日本語に変えて確認した。しかし学校の成績には反映されなかった。マイケル・ジャクソンを③YouTubeで見て、速くて発音できないところを何度も聴いて練習した。</p> <p>H：洋楽が好きなので、よく聞いている。難しいと思っても調べればわかるので、辞書は常に持ち歩いている。</p> <p>I： Skypeするときは、辞書を片手にやってみたりする。映画が好きなので、観る時は、はじめ英語音声・日本語字幕、つぎに英語音声・英語字幕で観る。</p> <p>L：受験英語よりも、実用英語の方が興味があつた。最近英語の学力低下を感じているので、夏休み明けにスピードラーニングを始めました。</p> <p>M：毎日の生活の中で、英語がわからない言葉が出たら、それを電子辞書で調べて、それを覚えるようにしている。趣味や娯楽にたくさん英語が出てくるからです。</p> <p>N： 今は、暇な時や通学の電車の中で単語帳を見るくらいです。</p> <p>K：文章の精読はずっとしていた。まず一通り時間を決めて読んで問題に解答、わからない単語にマーク、答え合わせ、単語調べる、構文調べる、熟語調べる……とわからないところを徹底的に調べて、最後は時間を決めそれ以内に全文和訳をしていたら、偏差値がかなり上がった。</p>
目的の設定	<p>C：短期的な目標（今週は単語を予習する）を立てて動機を維持。</p> <p>E：動機のなさから抜け出るためには英語が好きでないとダメで、将来英語を生かしたいと思っているから英語が好きである。</p> <p>F：英語を勉強しなさいと中学生の時から親に言われていたので、将来英語を使いたいと思っている。</p> <p>G：座ってやる勉強は嫌いなので、英語をしゃべる機会があつたら旅行したい。お金があれば留学してみたい。</p>

動機づけ方策	具体例 (B、I、J、Nは動機づけが常に高い学生一太字で標記)
目的の設定	<p>H：将来も仕事で英語を使うかどうかかわからないが、英語の勉強は続けていきたい。</p> <p>J：社会人入学で建築学を学びに来た。論文には英語が必要である。</p>
気分転換	<p>A：やるべきこと終えてから趣味に移る。</p> <p>D：とりあえず休憩をして、音楽を聴いて一回りフレッシュしてから勉強しなおします。この方法は自分で考えました。もともと音楽が好きなので昔から音楽を聴くと落ち着きます。ストレスをためると学校に来られなくなってしまうので、ストレスをためないようにしています。</p> <p>K：自信を失った時は少し英語から離れるか、もう一度基礎から勉強し直して初心に戻ります。</p> <p>L：英語がイヤになった時や自信がなくなった時は、Jポップを聞くようにしています。</p>
自己暗示	<p>A：英語が嫌いという考えをしない。</p> <p>B：苦手意識を持たないように、好きだと思込込むようにしている。</p> <p>C：出来る限り英語の意識を高め、重要性を認識すること、英語は積み重ねであるという意識を持って普段生活する。英語から気持ちを話さない。「よしやるぞ!」と思えたら高い意識で勉強できる体制をとる。</p> <p>K：「誰かにやらされているとか誰かの為にやっているなどの考えがあれば、力はずきません。自分が面白い・楽しいと感じたモノに興味を持つと他の人よりも前の位置にいられます。学ぼうとする姿勢や心構えがその人の能力を高め、結果として維持し続けられるのだと私は考えています。現在は、今まで理解できなかったことが理解できるようになり、ますます学ぼうとする意欲が高まっています。</p> <p>K：「また頑張ればいい」と心を改めて勉強しています。</p>
TOEICや大検等の試験を受ける	<p>C：高卒認定と大学検定試験のために予備校に通い始めた。</p> <p>J：仕事や学校を変えるたびに、その仕事や受験に資格を満たすために英語を勉強し続けたきた。たとえば、JICAだと、TOEICが750点ないとだめなので、5-6回受けて、それだけの点数にした。</p> <p>M：英検2級をとることで「英語嫌い」を必死で克服した。</p>
積極的に機会をつかむ	<p>B：出席日数不足のため公立高の受験が無理だったので、ニュージーランド留学の道を偶然見つけ、高校はそちらに行った。</p> <p>F：与えられた機会を逃さないようにしている。例えば、英語の選択科目を自らとるようにしている。また、</p> <p>H：大学に入ってから、同じ学科の友達と切磋琢磨する。大学2年のとき2週間留学した。</p>
実際に英語を使う	<p>G：日本に住んでいる外国人の家に1週間泊まった時に、アメリカ人の男の子と英語でコミュニケーションする経験が楽しく動機が出た。</p> <p>I：留学先の人とメールのやりとりをしている（がんばらなきゃと思う）。バイトしていても外国人を見ると英語を話したくなる。</p> <p>J：青年海外協力隊ではアラビア語を8割、英語を2割使っていた。</p>

先行研究と学生のコメントやアンケートから、学習者の「動機」と「動機づけストラテジー」の関係をみてきた。研究設問1「学生が動機を失くしたきっかけは何か」という質問に対して、大きく分けると、1) 文法学習の困難さ、2) 長文読解の困難さ、3) 教師との相性の悪さが、しかし、4) 英語学習の目的の不明瞭さについては、直接それが動機を失くした原因になったと答えた学生はいなかった。また、学生EとFは、「受験に失敗して動機を失った」と答えた。

「学生は「動機減退」を経験した時にそれとどのように向き合っているのか。」という研究設問に、受験に失敗した後に行った予備校の教師との出会いが、動機を回復した原因にもなっている。また、先生と相性が悪かったという学生Dと授業がつまらなかったという学生Gは、その後出会ったおもしろい授業をしてくれる先生や、学生Hのように夏期講習で出会った先生が、動機を回復したきっかけになっている。

また、学生AとBが動機を回復したきっかけは、自己効力感(self-efficacy)と関係している。学生Cは、自分が高校を卒業できないと分かった時、自分で高卒認定試験と大学検定試験を受けたと答えたからである。学生Gは、授業がつまらなくて動機をなくしていたが、自ら国内のアメリカ人家庭にホームステイをしたことも、自己効力感が高いと言える。多くの学生は学習方法を変える、自己暗示にかけ、音楽など学習に直接関係ないことをして動機を維持しているという結果が出た。

研究設問3「動機が高い学生は、どのような動機づけストラテジーを使っているか」。今回は動機をなくしたことがないという学生からの自己申告で「動機の高い学生」を選んだ。それらは、B、I、J、Nの4人であった。

学習の工夫は、動機をなくした学生も動機を回復するために行っていることであるが、傾向として「学生B：(留学先で)文系科目を避けて、必修の理数系科目を中心に授業をとるなどして、ある程度自分が知識を持っているものを履修するようにした。サークルのメンバー(英語話者)や同じ留学生の子に勉強や英語を色々教えてもらった。」「学生I：Skypeするときは、辞書を片手にやってみたりする。映画が好きなので、観る時は、はじめ英語音声・日本語字幕、つぎに英語音声・英語字幕で観る。」のように、他の英語話者や留学生に助けってもらったり、何回も同じ教材を使って学習したりしているなど、非常な努力をしている点である。

また、気分転換や自己暗示より、積極的に学習に取り込んだり、自分の道を開いていったりする傾向にある。たとえば、学生Bは、日本の公立高校に進学できないとわかった時、動機をなくさないで、積極的にニュージーランドの高校進学を考え、それを実行に移した。さらに、仕事や学校が変わるたびに、その仕事や受験に資格を満たすために英語を勉強し続けてきたJのような学生もいる。その学生は国際協力機構(JICA)で仕事を得るには、TOEICが750点以上必要だとわかっていたので、5-6回受けて、それだけの点数にしたと答えた。

動機の減退を経験した学生が、受け身の勉強をしているのに比べて、動機のある学生Bは留学先で積極的に他の学生を交流し、そこから学んでいる。学生Iも、留学先の人とメールのやりとりをしている（がんばらなきゃと思う）。バイトしていても外国人を見ると英語を話したくなると答えている。また、学生Jは実際に青年海外協力隊ではアラビア語を8割、英語を2割使っていたという経験を持つ。

以上、4大学で行った14人の学生の聞き取りとメールでインタビューした結果である。次に、学習者が言語学習ストラテジーについて知り、教師のサポートで自分なりに試し、練習することができる実践例を次のセクションであげる。

4. 動機づけストラテジーの実践例

教師にとって、このように動機づけストラテジーは学習者により個人差があり、学習者個人にあわせた動機づけストラテジーを教師が見出すことは一見困難といえるかもしれない。しかし、学習者の心情に寄り添うことができると考える教師は、心理的な面からのサポートが可能である。また、学習者のこれらの多彩な面を理解した上で、学習者の学習ストラテジーをサポートすることが大事である。

学習者はまた、多様な言語学習ストラテジーを習得するためには、言語学習ストラテジーについて知り、自分で試し、練習することが必要である。そうすることによって、自分で必要なときに選択して必要なストラテジーが使えるようになるのである。授業では、学習者にこのような経験をさせることができる。そして、学習者はその経験の大切さを認識し、授業以外でも応用するようになるであろう。読解やリスニングなどの例を下に述べる。

リスニングの授業の例をとると、授業中で行うリスニング量だけではリスニングの能力はあがらない。しかし、多くの学生は、リスニングの重要性はわかっているが、具体的にどのようにリスニング力をあげていったらよいのか分からないでいる。そこで、4つのリスニングアクティビティ（1. TOEICの練習、2. 英語の歌詞の聞き取り、3. 教師から学生への話しかけ、4. DVDの一部の書き取り）を行って、各学生にとってどれが一番自分に合っているかを書いてもらった。多くの学生は「歌詞の書き取りは楽しいが難しい」、「ドラマは状況がわかるので意外と聞き取りやすい」とのことだった。この2つはまた動機度が上がると答えた。「TOEICや先生が英文で言ったりするのは聞き取りやすい反面、勉強している感じが強い」と答えた学生もいた。その後、自分に合う学習法で、次週まで1週間リスニングを練習してくるという宿題を出すという自律学習につなげている。

TOEIC リスニングのクラスでは、普段学生は各々どのように勉強しているのかを4人くらいのグループで発表させ、その後勉強方法をクラス全体で分かち合いをした。すると、インターネットで無料のリスニングの教材があることや音楽や映画も利用しているなど、各自が自主的に勉強していることがわかり、それが互いの動機づけにつながった。授業では、英

語の発音ができない、また意味が分からないと聞き取れないのだから、単語の発音と文章の意味を理解した上で、音声を流し英文を常に音読し、自然の速さで読めるようストラテジーを教えている。そして、家でも繰り返し、シャドーイングをするよう指導している。また、大学に自習学習用の English Online の設備があるので、授業外課題として利用させている。一学期中に最低一回は TOEIC を受験することを勧め、600 点以上になったら教師に報告させるようにする。

読解の授業では、速読タスクを行っている。毎回、同様の問題を一定時間に読み、問題を解く。そして、解答をしてから、各自が自分の読み方について内省する。その内省は内省ログ (reflection logs) となり、教師によるフィードバックにより、新たな学習ストラテジーの提案や情意面の励ましなどを得る。また、毎回、問題を解く前に、内省ログを読み返すことによって、前回の自分を思い出し、新たな解き方の計画を立てることができる。さらに、回数を重ねると、自分の使用ストラテジーが効果的かどうかははっきりと点数に現れてくる。

また、授業内で問題を解かせる時に、早く終わる学生と遅い学生がいる場合、早く終わった学生にどのようなストラテジーを使ってその課題を早く終えることができたか答えてもらい、それを遅く終わった学生の参考になるようにする。

以上のように、学習ストラテジーと動機づけストラテジーを組み合わせるように教師が手助けすることは可能であるし、学習者も使用ストラテジーがはっきり点数に現れてくるので、励みにもなる。また、リスニングの点数を報告させたり、一律ではなく各自のやり方合ったリスニング学習の宿題を出すことで、自律学習を促すことになるであろう。

5. まとめと示唆

先行研究と学生のコメントやアンケートから、学習者の「動機」と「動機づけストラテジー」の関係性をみてきた。研究設問 1 「学生が動機を失くしたきっかけは何か」という質問に対して、先行研究の Shimizu, Abe, Ueda, 他 (2010) でも明らかになったように、1) 文法学習の困難さ、2) 長文読解の困難さ、3) 教師との相性の悪さが、この研究結果でも表れた。しかし教師との関係は、別の場面では、学生が「動機を回復した」きっかけにもなっている。学生 H のように、夏期講習で出会った先生が、動機を回復したきっかけになっているのも興味深い。これは Shimizu, Abe, Ueda 他 (2010) や保坂 (2008) の先行研究結果とも一致する。

先行研究にはない答を書いた学生 E と F は、「受験に失敗してやる気を失った」と答えたが、多くの学生は自己効力感 (self-efficacy) で動機を回復している。たとえば、学生 C は、自分が高校を卒業できないと分かった時、自分で高卒認定試験と大学検定試験を受け、動機を回復した。学生 G は、授業がつまらなくて動機をなくしていたが、自ら国内のアメリカ人家庭にホームステイをしたことも、自己効力感が高いと言える。

動機を維持するため多くの学生が、「学習方法を変える」、「自己暗示にかける」、「目的の設定を大きなものではなく目の前のものにする」、「音楽など学習に直接関係ないことをする」と答えたのは興味深い。

研究設問3「動機が高い学生は、どのような 動機づけストラテジーを使っているか」。自己申告で「動機の高い学生」を4人選んだ。学生Bを例にとると、希望の高校に行けないとわかった時点で自分で留学先をさがし、留学先では自分が予備知識を持っているものを履修するようにし、さまざまな情報と他の学生から学習支援を得ることに努力した。また、学生Iは、何回も同じ教材を使って学習するなど、動機を持続させるのに非常な努力をしていることがわかった。つまり、動機の高い学生は、気分転換や自己暗示より、積極的に学習に取り込んだり、自分の道を開いていったりする傾向にある。また、日々、留学先の人とメール交換で自分がんばらなければいけないと自らを励まし、学生IやJは英語を実践で使ってきたあるいは使いたいという願望があるので、それが動機づけになっている。

本研究の結果は、Ushioda (1996) にも表れているように、学習者のストラテジー使用は個人差があると示している。教師にとって、学習者個人にあわせた動機づけストラテジーを教師が見出すことは一見困難といえるかもしれない。しかし、反対に、学習者たちが Shimizu, Abe, Ueda, and others (2010) であげた動機を取り戻した教師像と、保坂 (2008) による成績上位者と下位者との結果を比較した教師像と重なる部分があった事からは、これらの先行研究に挙げられた教師像のいずれかに自分自身を近づけるような工夫はできると思われる。例えば、圧倒的な知識の深さで学習者をサポートできると考える教師は学習者に対して教科書など授業で扱う内容に付随する様々な知識へ誘うことができるであろう。また Shimizu, Abe, Ueda, and others (2010) での第二の教師像として挙げられた学習者の心情に寄り添うことができると考える教師は、その役割を、英語の教授に付加し、心理的な面からのサポートが可能となるのではないだろうか。このことは、学習者のこれらの多彩な面を理解しようと努めることへもつながるであろう。

後者の例として、学習者が多様な言語学習ストラテジーを習得し、言語学習ストラテジーについて知り、自分で試し、練習することが必要であると感じ、教師が学習ストラテジーと動機づけストラテジーを学習者に示し、実践するという例をあげてみた。学習者がその経験の大切さを認識することは動機づけストラテジーにつながる上、授業以外の応用では自律学習につながっていくであろう。また、上位の学習方法やストラテジーを学ぶことで、他の学習者の参考になる。

本研究は、14人という被験者を使って動機づけストラテジーを聞き取り調査でデータをとった。予備研究ではあるが、被験者の数、4大学で条件が異なったインタビュー、聞き取り調査の一貫性について今後の課題になるであろう。

最後に、常に動機の高い学生Jは、インタビューの中で、「昨今の学生は給料の高いカッコ良い人に憧れる傾向にある。もし彼らが魅力的に思えるような模範になるような人がいれ

ば、彼らももっと（英語を）やる気になると思う」と述べていた。本研究の「動機が高い学生」が用いたストラテジーや授業での実践例が、そうではない学生の参考になるよう、被験者が用いていた数々の動機づけストラテジーを分析して学習者へ紹介する方策を考えることも課題と言えよう。

参考文献

- 荒このみ (2008)『問いたい学生の「勉強力」』朝日新聞、2008年6月2日、朝刊、多摩版
- 荒井貴和 (2008)『言語学習における動機減退：学習者が動機を失ったと感じる時』獨協大学講義ハンドアウト、獨協大学、2008年1月23日
- 植田麻実、阿部恵美佳、清水順他 (2011)「大学生の英語学習における動機減退要因の予備調査」『リメディアルの視点から — 大学生の英語学習意欲減退調査と学習者自律へのニーズ分析』pp. 11-16、科学研究費基盤研究 (C) 20520529 報告書
- 保坂芳男 (2008)『英語教師像に関する研究 — 成績上位者と下位者の比較を中心として —』東京：風間書房
- Chambers, G. (1993). Taking the 'de' out of demotivation. *Language Learning Journal*, 7, 13-16.
- Dörnyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ellis, R. (2001). *The study of second language acquisition*. 8th ed. Oxford: Oxford University Press.
- Gardner, R. & Lambert, W. (1959). Motivation variables in second-language acquisition. *Canadian Journal of Psychology*, 13, 266-272.
- Kikuchi, K., & Sakai, H. (2009). Japanese Learners' Demotivation to Study English: A Survey Study. *JALT Journal*, 31 (2), 183-204.
- Oxford, R., & Shearin, J. (1994). Language learning motivation: Expanding the theoretical framework. *The Modern Language Journal*, 78, i, 12-28.
- Oxford, R. L. (2011). *Teaching and Researching Language Learning Strategies*. Hallow, UK: Pearson Education.
- Shimizu, S, Abe, E., Ueda, M., Okuda, S., Ishizuka, M. (2010). What makes Japanese university students overcome their feelings of demotivation toward English study? *The 22nd Japan-U.S. Teacher Education Consortium (JUSTEC) Conference Report*, total 12 pages.
- Sugino, T. (2011). Teacher Demotivational Factors in the Japanese Language Teaching Context, *PROCEDIA*, vol. 2 Issue 7, total 7 pages.
- Trang, Tran T. & Baldauf, R. B. Jr. (2007). Demotivation: Understanding resistance to English language learning – The case of Vietnamese students. *The Journal of Asia TEFL Vol 4, No1*, 79-105.
- Ushioda, E. (1996). *Learner autonomy : The role of motivation*. Dublin: Authentik.
- Zang, Q. (2007). Teacher misbehaviors as learning demotivators in college classrooms: A cross-cultural investigation in China, Germany, Japan, and the United State. *Communication Education*, 56 (2), 209-227.

付記

植田麻実（東京工科大学）、阿部恵美佳（大東文化大学）、清水順（立教大学）

(付録1)

工学院大学の機械工学の学生に習熟度別の授業についてアンケートをした時に、英語が前から好きで、英語をこれからもがんばって勉強したいと答えた学生を選んで、メールで以下のような質問をした。

質問：「みなさんは英語が得意な方だと思うのですが、それを維持していくためにどのような努力をしてきましたか。また、今はどうですか。英語が嫌になった時、自信がなくなった時はありますか。そのような時はどうやって克服してきましたか。」

(すぎの としこ 本学教授)

(うえだ まみ 東京工科大学)

(あべ えみか 大東文化大学)

(しみず すなお 立教大学)